

第37回国際応用動物行動学会議での 研究発表並びにイタリアの畜産事情の視察

河 合 正 人

畜産科学科食料生産科学講座助手

1. 目 的

第37回国際応用動物行動学会議に参加して研究成果をポスター発表し、世界各国の動物行動学者との意見交換を図るとともに、イタリア北東部地域の家畜生産現場を視察した。

2. 期 間

平成15年6月23日～平成15年7月2日

3. 場 所

イタリア・アバノテルメ

4. 内 容

1) 第37回国際応用動物行動学会議

第37回国際応用動物行動学会議(ISAE)は、2003年6月24日から6月28日にイタリアの水の都ベネツィアからバスを乗り継いで約2時間、アバノテルメという町のTerme Alexander Palace ホテルで開催された。ISAEは毎年開催されている国際会議であるにもかかわらず、例年150題以上の研究発表があり、非常に活発な国際会議である。一昨年、日本でも応用動物行動学会が設立され、また来年8月には第39回ISAEが日本(東京)で開催される。今回の会議には28カ国から288名が参加し、“Behavioral test”, “Human-Animal relationship”, “Extensive animal management”の3つが大きなテーマであった。それぞれのテーマについての招待講演と、196題の発表(口頭発表93題, ポスター発表103題)があり、日本からの参加は私を含めてポスター発表が10題であった。またワークショップとして“Qualitative assessment of behavior”, “Behavioral problems in rabbit production”, “Welfare of sheltered dogs”の3つが行われ、毎日非常に活発な議論や行動学に関する意見交換が行われた。

近年、動物行動学の分野で多くなっているのが「動物福祉」と「問題行動」で、本会議において

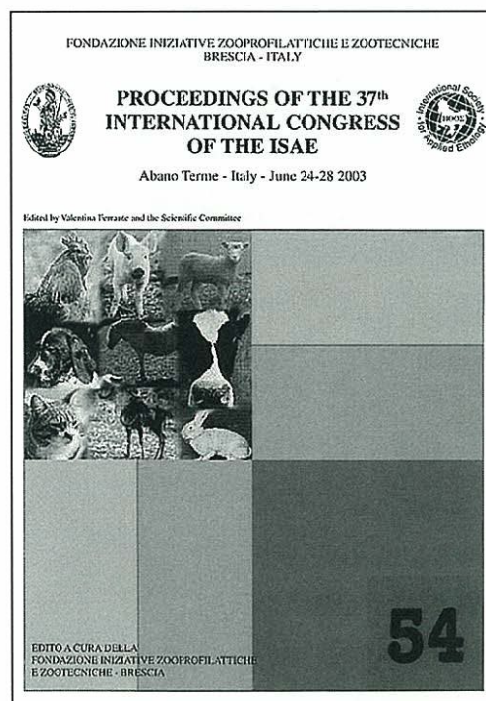


写真1. 学会抄録の表紙

も問題行動治療を教育や職業の新しい分野として提言する話題提供がなされた。多くの問題行動はヒトによる飼育方法や扱い方に関係しており、動物行動治療学の最も重要な側面はヒトと動物の関係に向けられる、また科学的知識に基づいた専門的助言として飼育者を気付かせることによって動物福祉を改善できる、というものであった。私が発表した“Extensive animal management”の分野においても動物福祉と関連したものが多く、家畜の放牧も長期ストレスを引き起こさない飼養方法との観点から発表する研究者が数多くいた。さらに、ヒトに対する動物の恐怖レベルを評価することは、農家での福祉レベルを評価したり管理者の質を評価するのに役立つだろう、との話題提供もあり、今後日本の家畜生産においても動物福祉やヒトと家畜の関係といった側面からも評価されるようになるであろうし、また研究分野としても広がっていくものと思われる。



写真2. ISAE 会場

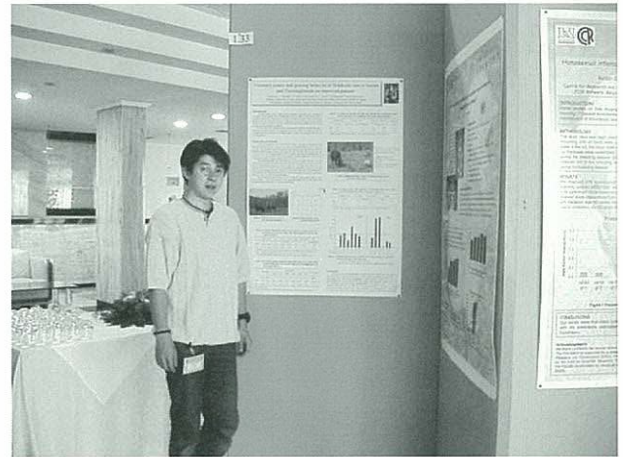


写真3. 研究成果のポスター発表

2) イタリアにおける酪農の現状

EUにおける酪農の全般的な傾向として、生乳生産は家畜改良に伴う1頭当たり乳量の増加と飼養規模の拡大によりわずかながらも増加しつつあるが、各加盟国とも酪農家戸数が減少しつつあり、経産牛頭数が減少傾向で推移している。乳用経産牛飼養頭数があわせてEU全体の4割に当たるドイツとフランスでの頭数減少が最も著しく、さらにイギリス、オランダなど主要酪農国での減少も目立っている。一方、イタリアでは酪農家からの強い要求に伴い2000年4月から生乳生産割当（クォータ）が拡大され、ここ数年は前年に比べ2万5千頭近い増加となっている（前年比約1.2%）。

EUの共通農業政策改革では、クォータは2005年度から2007年度に加盟国へ毎年0.5%ずつ、合計1.5%の増枠が行われる。しかしEUの乳用経産牛飼養頭数については、クォータの増加にもかかわらず、主要酪農国を中心に酪農家戸数の減少による頭数減が規模拡大による頭数増を上回るスピードで進行しているため、全体的には引き続き減少傾向での推移が見込まれるだろう。ただし、イタリアについてはスペイン、ギリシャ、アイルランドおよびイギリスとともに、これを上回る増枠が行われたため、総計で2.4%の増枠（全体で約1億2千万トン）となる。このため、生乳生産については当面、増加傾向となり得る枠組みだけは用意されている。

アバノテルメはイタリア北東部に住む人々にとっての保養地であり、温泉施設（といっても日本のようなものではなく、プールなどのリハビリ施設が多い）を持ったホテルが数多く存在する町で



写真4. ホテルの庭で飼われていたポニー

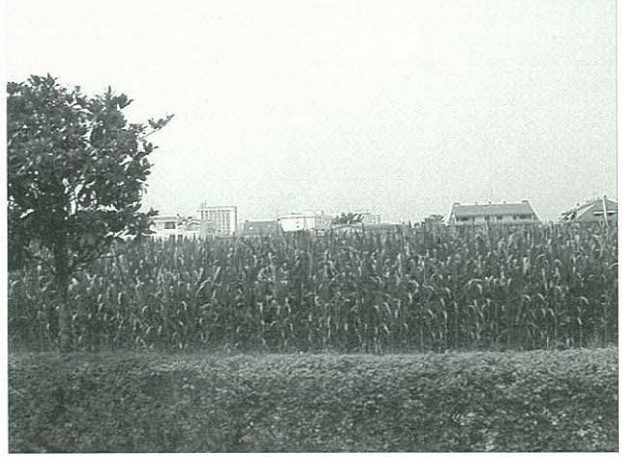


写真5. 町外れに広がるスイートコーン畑

ある。したがって、町中でみかけた家畜といえば、ペットとしてホテルの庭で飼われているポニーだけであった（写真4）。また、町外れには比較的大規模なとうもろこし畑があり、一瞬十勝の風景を思い出したが、当然これらはデントコーンではなくスイートコーン、人間用であった（写真5）。

学会が主催するエクスカージョンは、ベネツィア観光と Alpine summer range の見学に分かれて行われた。Alpine summer range はオーストリアとの国境、ドロミテ山塊にあり、山全体をいくつかの農家でシェアし、いわゆる夏山冬里方式のイタリア版で、公共牧場的な使い方をしている（写真6）。またチーズ工房と食事施設も完備しており、観光客に対するグリーンツーリズム的な使い方もされていた（写真7）。ここでは配合飼料を一切給与せず、しかも搾乳牛を子牛と一緒に放牧飼養しているところが日本と大きく異なり、おもしろい点でもあった。さらに日本の草地のようにホルスタインだけが単一品種で放牧されているのではなく、様々な品種の牛が放牧されていることも、広大な風景とともに観光客の目を楽しませてくれる。近年、日本でも観光牧場が増えてきており、当然日本的な風景を維持しながら日本独自の牧場を作っていくべきではあるが、ヨーロッパ的な飼養方法や牧場のあり方についても学ぶべき点が数多くあるように思えた。

最後に、今回の会議参加に際して多大な御支援を賜りました帯広畜産大学後援会に対し、心よりお礼申し上げます。



写真6. Alpine summer range での放牧風景



写真7. Alpine summer range 特製チーズ